和泉キャンパスの歴史・由来①

- 現所在地は、東京都杉並区永福1-9-1で、最寄駅は、京王線・井の頭線「明大前」駅である。（キャンパス名の不思議？）
- 旧東京府東多摩郡和泉村→1889年(明治22年)5月1日、町村制施行により、和田村、堀ノ内村、和泉村及び永福寺村が合併し、東多摩郡和田堀内村大字和泉となった。

(現在では、杉並区の町名「和泉」として残存している。)

- 明治大学和泉校舎と隣接する築地本願寺別院和田堀廟所の付近一帯は、江戸幕府の鉄砲弾薬等の貯蔵庫の「和泉新田御焔硝蔵(火薬庫)」があったところである。
- 火薬庫の広さは八町八反（26,400坪）で、そこに平屋建ての火薬庫が13棟あり、1棟ずつ高い土手で囲まれていたとのこと。

和泉キャンパスの歴史・由来②

- 明治維新の際、この塩硝蔵は官軍に接収され、その弾薬は上野彰義隊や奥州諸藩の平定に使用され、その威力を発揮したとのこと。

- その後この地は、兵部省を経て「陸軍省和泉新田火薬庫」として再開されたが、関東大震災後の1924年(大正13年)、陸軍軍縮のため廃止され、敷地は1930年 (昭和5年)に、明治大学と築地本願寺(和田堀廟所)に折半して払い下げられた。

- 1930年(昭和5年)2月開催の本学商議員会における用地買収決議を受けて、1934年(昭和9年)4月16日に、本学予科独自の校舎として落成した。

- なお、和泉校舎は、太平洋戦争中の1944年(昭和19年)5月に徴用のため、駿河台に一時移転を余儀なくされた。

和泉校舎建設用地(予科グラウンド)

1930年（昭和5年）、予科校地として取得した頃の和泉用地。校舎建設前は、予科グラウンドとして使用していた。この頃は、まだ帝都電鉄（井の頭線）は開通していない。1933年8月渋谷・井の頭公園駅間が開通した。

和泉校舎と正門前の玉川上水

1934年（昭和9年）和泉校舎竣工時の正門前には、江戸時代に開削された玉川上水がのどかに流れていた。

現在の和泉キャンパス付近の玉川上水

ウィキペディアより

現在

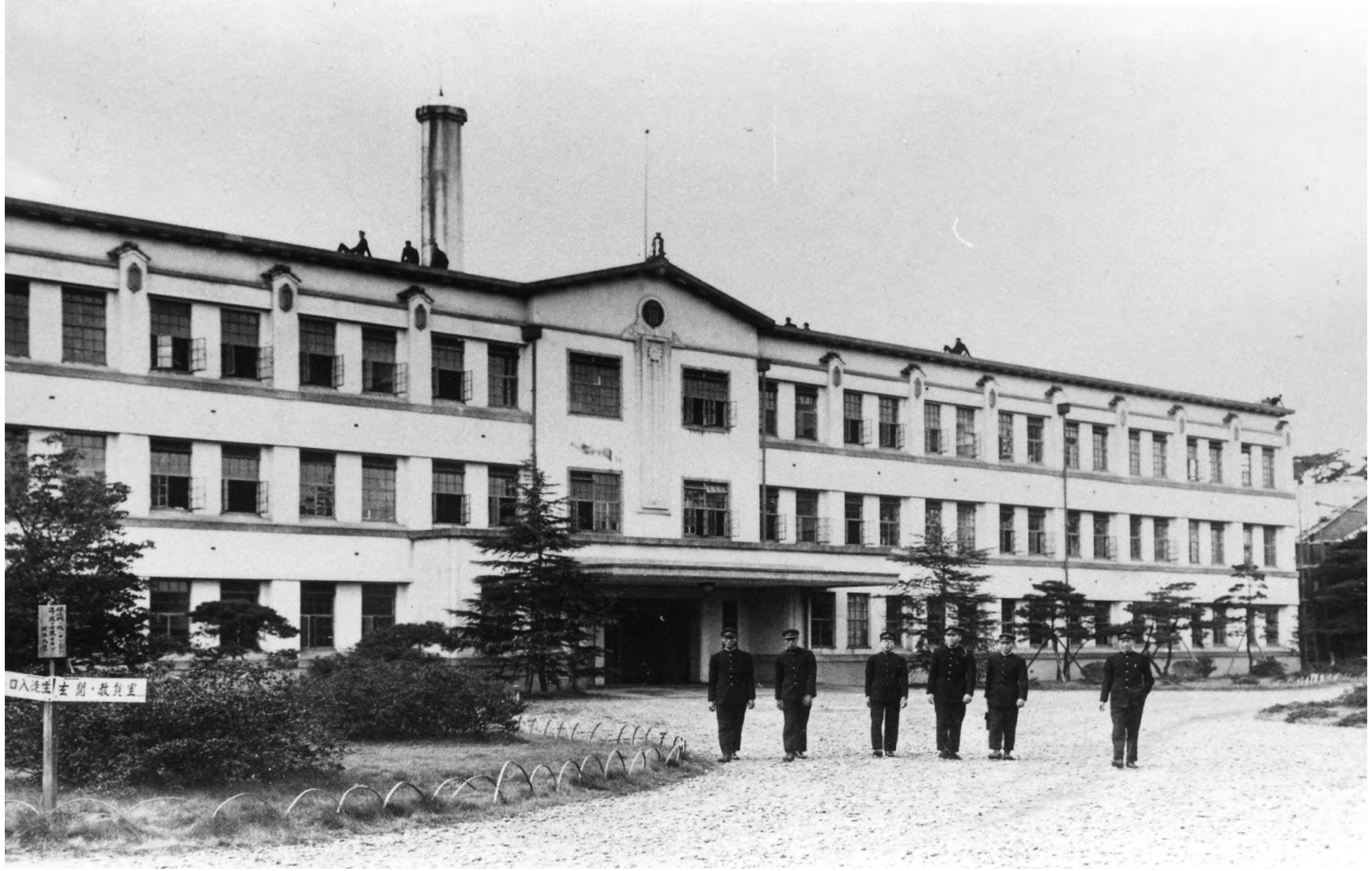
現在の和泉キャンパス付近の玉川上水は、暗渠となっており、また、井の頭線を跨ぐ部分は巨大な鋼管となっている。

和泉校舎の全景　1935年(昭和10年)　※開設は前年

この頃の和泉校舎は、敷地の半分近くが**野球部のグラウンド**だった。

（現在の和泉グラウンド,グローバルビレッジ用地は、当時は**安田火災海上保険㈱所有。1964年本学が購入**）

和泉キャンパス　旧第一校舎　1942年(昭和17年)



旧第一校舎は、現在の「メディア棟」のある場所に建設された。

生田キャンパスの歴史・由来

生田校舎正門　1955年(昭和30年)頃

生田キャンパスの歴史・由来

- 現在の生田キャンパスの前身は、元第9陸軍技術研究所（通称：登戸研究所）の跡地（それ以前は、日本高等拓殖学校の校地）
- 1945年10月、米軍により接収された後、慶応義塾大学予科の校舎として使用されていた用地の払下げを受け、1950年（昭和25年）5月、生田キャンパスとして開設（土地約25,000坪　開設当時）　※現在は約51,400坪
- 翌1951年（昭和26年）4月、農学部の前身「明治農業専門学校」の廃止に伴い、農学部が生田キャンパスに移転
- 1953年（昭和28年）4月、経営学部が生田キャンパスで開設（1956年に駿河台に移転）
- 1964年（昭和39年）に、駿河台から工学部が移転してくるまで、生田は「農学部」のキャンパス

登戸研究所とは？　1

- 登戸研究所は、戦前に旧日本陸軍によって開設された研究所である。時には、人道上或いは国際法上大きな問題となる秘密戦兵器（風船爆弾、怪力光線、毒物、偽札等）・資材を研究・開発していた。
  正式名称は、第九陸軍技術研究所であるが、研究・開発内容を決して他に知られてはいけなかったために、「登戸研究所」と、秘匿名で呼ばれていた。

- 登戸研究所は、アジア太平洋戦争において秘密戦の中核を担っており、軍から重要視された研究所であったが、　終戦とともに閉鎖された。その後、1945年（昭和20年）に、登戸研究所跡地の一部を明治大学が取得し、現在の明治大学生田キャンパスが開設された。（現在、約5万坪）